

有島武郎の 同志社講演

内 田 満



有島 武郎

明治四十年春、ヨーロッパから帰国した有島武郎は、スイスで知ったティルダ・ヘックにあつて「Greeting from Kyoto. (Rome of Japan)」と書き送った。北海道

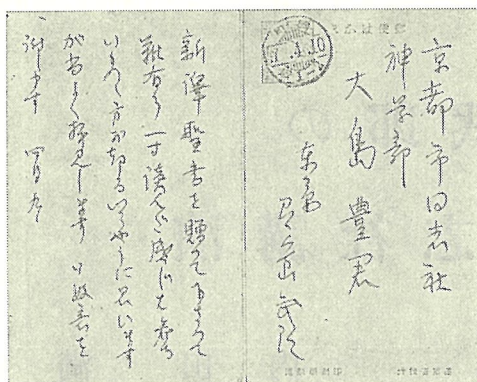
(札幌・ニセコ)や東京とは比すべくもないが、「日本のローマ」と呼ばれた京都もまた、その後この作家とかかわり合いを持つことになった土地の一つである。

有島武郎の作品と足跡に心惹かれていたわたくしは、いま京都に住んでいるところから、また同志社で学んだ縁故から、その同志社講演について深い関心を持っている。そんなことから、さきに「京の有島武

郎——同志社講演の日程、そのほか」(『巖本』別冊 第二号 昭和五十三年三月三日・巖本記念会)を書いたのであったが、その後明らかになったことがらもあり補正すべき点も出てきた。表記のテーマで一文を書く機会を与えられたのを幸いに、同志社講演にマトをしぼって前稿の誤りをただし、その後明らかになった事がらを書き加えておきたい。

大正三年十一月、有島は一家をあげて札幌を去り、帰京した。妻安子が肺結核にかかり、温暖な土地で療養する必要があるからである。安子をはじめ鎌倉に転地し、ついで平塚の病院に入院した。そのため、彼は翌年三月に東北帝国大学農科大学(もと札幌農学校)の教職を離れた。七年余にわたる教員生活に終止符をうった有島は、後年、この転機を作家生活への出発点として回想している。有島はここで教員から作家に転身したのであったが、彼が教壇から学生に語りかけることに興味を失ったのではなかった。

大正五年には慶応大学の教職に就く話を持ちあがり、彼自身も「一学年の間、ホ



大島豊にあてた有島の葉書

イットマンを教へようと思つて居る（同年四月二十二日・日記）と意欲を示していたが条件がくい違つて実現しなかつた。その後は他に教職就任の話もなく、大正七年秋から大正十一年秋にわたつておこなわれた同志社での講演が、作家有島にとつて唯一の「教壇」になつたのである。

有島武郎の同志社招聘を企画し推進したのは、札幌での教え子の一人で当時同志社神学部在籍していた大島豊である。大島

は北海道小樽の出身、札幌の農科大学で有島に学んだのが互いに知り合うきっかけになつた。彼は有島を文字通りの知己として敬愛し、有島もまた彼を自分の弟のように遇した。大島が同志社にはいったのは内村鑑三の勧めに従つたものだが、有島もそれに賛成して学資援助を約している。のちに大島は、有島を招くに至つた経過を、

「彼は関西の風景に久し振に接したいと望んでゐたので、私は同志社の当局に彼を招聘する事を奨めたのであつたが、大正七年の新学期から、春秋各一ヶ月間臨時講演する事が決定したのであつた。

彼の如く境遇に恵まれた人が旅行したいと思ふところへ意の儘に出掛けるのは、世間では普通の事なのだが、彼にあつては他から特殊な機会が与へられなければ、単なる遊覧気分で旅行することを好まなかつたからである。」（「有島武郎」昭和十年十月「セルパン」）と回想している。

大島の努力が実を結んで、大正七年二月末にはその春からの出講が決定している。同志社との約束が出来て私も五月頃には

一ヶ月京都に行くことになりました（同年二月二十七日付 生馬夫妻あて書簡）。さらに翌月には、へ一年に二度四週間位づゝ同志社の文科で講演をする事になりました。其機会に京都の土地といふものも研究して見たいと思つて居ます（三月十六日付吹田順助あて書簡）とも書いています。

大正七年四月一日付で「大学英文科講師」の辞令が出た。「同志社教職員台帳」の有島武郎の項には、へ大正七年四月一日大学英文科講師に依嘱（報酬毎学期百円及旅費二十円支給ノ事）と記載されている。しかしこの春有島は高熱にたおれ、入院までするはめになつてしまつた。やむをえず前期の講演はとりやめになり、秋によやく第一回の講演が実現したのである。

○有島講師講演 文学部講師有島武郎氏は英文科に於て授業の外、科外講演として芸術論八回講演を公会堂に開かれ目下進行中なるが毎回多数の聴講生あり。

「同志社時報」一五八号
（大正七年十一月一日）

有島は、同志社での初めての講演のもようを日記に次のように書きとどめている。

〈十月二十一日(月) 朝は花曇りのやうに曇つた。……

朝十時から同志社に行つて、文科一年に Carpenter の “Civilization, Its Cause and Cure” を教へた。十三四人の生徒で非常に心地よく教へる事が出来た。……午後二時 chapel に於て開講した。社長が僕を紹介して呉れた。会衆は存外多く約五百五十人内外に達したと思ふ。Introductory speech をやつた。約一時間五十分。聴衆は喜んで聞いて呉れたやうだつた。〉

当時、この授業・科外講演を聴かれた小野義夫氏によると英文科生対象の授業を通してでおこなわれたのはこの回だけで、翌年以降は科外講演一本にしぼられていったということである。これは、手塚竜麿氏の「同志社で聞いた有島武郎のホイットマン講義」(昭和四十四年六月「英語青年」)に、〈翌年の四月にはまず前秋の文学論の残りをすませ、小教室での文明論も適当な

ところでできりあげ、五月からはホイットマン講義一本建てとなつた〉とあるのとも符合する。

有島の講演は期待と注目のうちにはじまつた。〈十月二十一日遂に其日がやつて来た。会場はチャペルで、英文科生が前面に控へ法経科及オール同志社の学生にも自由聴講を許した。定刻午後二時前にチャペルに出かけて見ると、もういつぱいの聴衆で驚いたことには京大や三高の学生がぞろぞろ詰めかけてゐる。特に眼立つたのは女の聴衆が多いことであつた。これは当時英文科一年に在籍した片山春一氏の回想「有島武郎」昭和十年十月・同志社校友同窓会報第百号特集「我等の同志社」である。手塚氏もまた、〈文学論のときから大教室はすぐ満員になつたのでけれども早い昼食をすませて座席確保に大奮だつた。内部の学生だけでなく、京都大学や三高の学生もきて早くから陣取り、女性の聴講者も目だつた〉と書いている。小野義夫氏は、右手に有島の「宣言」を持ち、左手に河上(肇)の「貧乏物語」をかかえているのが大正青年の姿だつた、と語っておられた。当時の

学生間における有島・河上の絶大な人気をかいまみる思いがする。

この秋の講演は、十月二十一日(月)・二十二日(火)・二十八日(月)・二十九日(火)と順調に進んだが、悪性感冒流行のために十一月二日から十七日まで休校の措置がとられ、その後講演のおこなわれたのは十一月十八日(月)の最終回のみであつた。四週間8回の予定が1週間延びたうえに、回数には五回にとどまつたのである。講演内容については、小教室の授業がカーペンター、公開講演の方は芸術論とだけしかわからなかったが、さいきん笠原芳光氏が「基督教世界」(週刊)の大正八年三月二十七日号から五月三日号まで六回にわたつて講演要旨が分載されているのを発見された。氏のご好意によってわたくしもその内容をコピーさせていただいた。各回の小見出しは次のようになっている。

- 緒言 第一講 内部生活の現象
- 第二講 分解より総合へ 第三講 三様の生活動向 第四講 運命と人
- 第五講 生命の作用即ち愛 第六講 愛の主体なる自己と世界

○有島武郎氏講演 四月廿九日より五月廿一日迄毎週火水の両日午後二時半より致遠館に於て同氏の「芸術論及ホイットマン」に就ての科外講演ありたり。

「同志社時報」一六五号
(大正八年六月一日)

これが第二次の講演である。この講演のテキストとして、有島はみづから『ホイットマン詩集』(大正八年四月十六日発行・警醒社)を編集した。B6 版本文四十六ページ、表紙は白地に若草色で

WHITMAN'S POETICAL WORKS
SELECTED BY/T. ARISHIMA

KEISEISHA/TOKYO

と印刷した瀟洒な小冊子である。とびらも同色、書名、編者名が同じように書かれているが発行所名が消え、かわりに一枚の小さな葉がカットとして中央部に描かれている。《草の葉》にちなんだものであろう。

講演したのは、四月二十九日(火)・三十日(水)・五月六日(火)・十三日(火)・十四日(水)・二十日(火)・二十一日(水)の七

回であったと思われる。五月七日は「皇太子殿下立太子」のため休校になっているからである。手塚竜磨氏によると、四月中の二回は前秋の講義のつづきで、五月六日以降が前記テキストによるホイットマンの講義であった。これは、有島日記に「芸術に関する講義を終へた」(四月三十日)・「ホイットマンの生活について講義」(五月六日)とあるのと符合している。会場には致遠館の大教室があてられた。致遠館は大正五年三月に竣工した新館で、同志社社史史料室の河野仁昭氏は、前秋のチャペルとともに教室としての広さもさることながら、遠来の講師に対する同志社当局の厚遇をあらわすものであったろうと言われる。

五月十四日、クラーク神学館二階の教室で有島武郎歓迎会が開かれた。あいさつに立った嶺岸四郎英文科長は「へできることならレジデント・プロフェッサーとして来ていただきたいかった」と歓迎のことばを述べた。参集者の間からその作品についての感想なども語られたようで、尾関岩二氏は「滝山週参は…実にまじめな勉強家で、有島武郎の歓迎会に、氏は『お末の死』の一篇

を持ち出して、『宣言』なんかの様な大味なものばかり読んでゐた私たちを驚かしたものであった」と書いている(「クラスの追懷」昭和六年四月十五日「同志社時報」)。當時有島は、『或る女』後編の結末を書きあぐねて苦しんでいるさなかであった。同じ日の足助素一あて書簡に「原稿の違約だけは察してくれ。……全く葉子はしぶとい女だ」と訴えている。この五月から彼は洛南北向不動堂の一室を京都での仕事場とするようになった。

○有島氏の講演 十一月三日より毎週月火両日致遠館講堂に於て同講師のイブセンを中心とせる北欧文学に関する講演あり、同十八日第六回を以て終了せり。

「同志社時報」一七〇号
(大正八年十二月一日)

この秋は老母を伴って十月二十三日夕刻に東京を發ち、伊勢山田(二十四日)・奈良(二十五日)を見物してから入洛した。京都では桃山・宇治を案内し(二十六日)、その後講演準備のかたわら「三部曲」最後

の『聖餐』を脱稿している。同志社での講演は十一月三日（月）から始められ、四日（火）・十日（月）・十一日（火）・十七日（月）・十八日（火）の六回にわたっておこなわれた。五日には母を伴って大阪方面に出かけたが、同日、原久米太郎にあてて「講演はこの三日四日と既にしました。いゝ加減な内容であるのにも不係聴衆二百を数へんとするは如何に彼等が思想的に自己改造の急を感じてゐるかを思はせられる。而して僕が十二分に糧を与へ得ざる事を残念に思つてゐる」と書き送っている。

同志社のほかにも、大阪上本町の清水谷女学校で「ある婦人会」のために（十一月二日）、また京都岡崎の図書館でP.L.会のために（十九日）、さらに「二十一日の午後と夜にかけて二回他で話を頼まれてゐる」（「原あて書簡」）という多忙な毎日であった。P.L.会は、厨川白村夫人など大学教授の婦人連や「中京辺の奥様や娘さん等凡ゆる階層の人々が蒐まつて忽ち三百人を数へる」に至つた婦人会で、PとLは進歩と愛を象徴するのだという（大正九年五月三日「読売新聞」）。

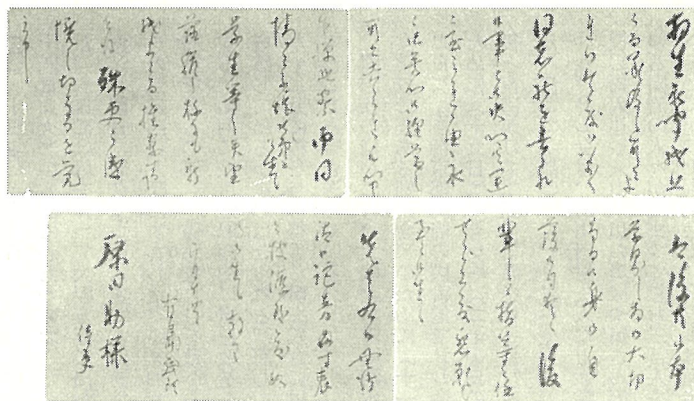
有島には、しかし一つの楽しみがあった。それは、前記の大島豊ら同志社の学生を中心として運営され、有島自身も新村出・成瀬無極とともに相談役を引受けていた劇団エランヴィタルが踏路社と合同で『出家とその弟子』の公演を準備していたことである。公演は十一月二十日・二十一日の両日京都市公会堂でおこなわれることになっていたが、彼は早くからその舞台を観る予定を立てて、友人にも観覧を勧めていた。観劇に加えて「倉田百三氏も来洛するさうだから面会が出来ると思ふ」（十一月七日付足助あて書簡）という期待もあった。松本克平氏の『日本新劇史——新劇貧乏物語』（昭和四十一年十一月十日・筑摩書房）によると、エランヴィタルは同年四月二十三日から三日間チェホフの『犬』などとともに『出家とその弟子』（第一幕）を試演しており、「作者の倉田は宿病のために客席に寝たまま見物した」のであった。しかしこの秋の上演に際しては倉田は来洛しなかったやうで、有島はその舞台は観たが倉田には会えなかった。翌月エランヴィタルは有島の『死と其前後』をとりあげた

（十二月七日から三日間、京大学生集会所で上演した）が、これは帰京後で見ることができなかった。

○科外講演 大学文学部に於ては五月三日より十九日迄毎週二回（六回）有島武郎氏の科外講演あり、演題は「イブセンを中心とせる北欧文学に就て」の研究にて前学年よりの続きなり

「同志社時報」一七六号
（大正九年六月一日）

この講演を聞かれた岩崎博氏は、当時の日記から関連事項を抄録して送つて下さつた。「時報」の記事と岩崎氏の記録を照合するとこの春の講演は、五月三日（月）・四日（火）・十日（月）・十一日（火）・十八日（火）・十九日（水）の六回にわたっておこなわれたことが確かめられる。講演のテーマが昨秋に引きつづきイブセンを中心とした北欧文学であったことは書簡にも見えるが、岩崎氏によると有島ははじめに書き終えたばかりの『惜みなく愛は奪ふ』を朗読して聞かせ、愛について「人は第一に自己



原田助（元社長）にあてた有島の書簡

を愛す。他を愛すとは即ち自己の一部とな
りたるものについて一つのものを愛すると
同じく愛するのだ」というような話を（人
生観とでもいうもの）として語ったそうで
ある。

たぶん同じ講演をさすのであろう、片山
春一氏の回想（前掲）には次のように書か
れている。〈吾々に最も深き感鳴を与へた
ものは……『愛は惜みなく奪ふ』の講演で
あった。北海道農大に学んだ氏は基督教の
教養を受け多年米国に於て基督教の厳しき
雰囲気の中に氏の青春を過しながら遂に宗
教に入り得なかつたことを基督教主義をも
つて任ずる吾等の青年学徒の前に告白して
文字通り声涙下るの真剣味の溢るゝもので
あった。聴衆の其所此所から噁り泣く声が
聞え、数分間は講師も学生も息を呑んで無
音の静寂が続くのであった〉。

いったいに有島の講演には自己の感情を
正面から聴衆にぶつける激しさがあつた
ように思われる。ときにファナティックで
あつたと言われ、牧師の説教が連想される
と言われたのも理由のあることであつたら
う。それを語る、謡できたえた発声やおだ

やかな風貌が渾然として、多くの聴衆を魅
了する独特な雰囲気がかもし出されたよう
である。〈有島武郎の講義よりは堂に入っ
たものだった。その美声は魅力的で、詩を
読みあげるのも朗々として立板に水を流す
ように寸分のおとみもなく、場内はしーん
とした。……黒の洋服を上品に着こなし、
顔面がやや紅潮していたその時の姿がいま
も網膜に残っている〉——。これは手塚竜
麿氏による前掲文の一節である。

河上肇と会い、また倉田百三を明石に見
舞つたのもこの五月である。有島は講演の
最終回到、〈来学期はバイロンの研究だ〉
と予告している。しかしその秋は同志社で
の講演を断らざるをえなかつた。『運命
の訴へ』放棄（九月中旬）をもたらしした創
作意欲の〈落潮〉と、あらたな創作主体と
しての自己を確立するための生活改造——
ことに農場放棄の準備が急務となつたから
である。バイロンについての講演は、翌年
春に実現するはこびとなつた。

○科外講演 四月十三日より二十八日
迄毎週水木両日（六回に亘り）午後
三時より致遠館大講堂に於て有島武

郎氏のバイロンに就て」と題する科外講演あり。

「同志社時報」一八六号
(大正十年五月一日)

この講演旅行には、母と三児を同伴してゐる。子どもたちを楽しませようとしてか船で神戸まで行き、六甲山ホテルに一泊した。翌日は大阪見物に当て、京都に入つたのは四月一日である。その後九日に子どもたちを帰京させるまで、彼にとっては家族サービスの連続であつた。へ今度位何もせずにはめをはずして子供と遊んだ事はありません」と言い、それがたつて講演なればの二十六日になお「書物と首引き」の準備を強られるはめになつた。

講演がおこなわれたのは、四月十三日(水)・十四日(木)・二十日(水)・二十七日(水)・二十八日(木)および五月三日(火)の六回であつたようだ。最終回が五月にずれ込んだのは、二十一日(木)の講演を休んだためであろう。この日母が帰京してゐる。彼は講演の準備を進めながら「當時の熱狂詩人バイロンの熱情は今の私にもひし」と響いて来て時々熱涙を要求します。

今更に心熱の強さの恐ろしさを思ひます(四月二十六日付 茂木由子あて書簡)と書き、また「講演は会心の思ひを以て続けてゐます。聴衆も満堂にて熱心に聞いてくれます。ああやつて話しをしてゐると自分の中にはありながら形を取らなかつたものが段々はつきり現はれて来るのを見出します。それだけが私に取つての収穫です(四月二十八日付 生馬夫妻あて書簡)とも書いてゐる。前年、彼をうちのめした「落潮」はなお続いてゐた。彼は「バイロンの熱情」を語ることによつてその「心熱」をわがものとし、へ自分の中にありながら形を取らなかつたもの」に形を与える糸口をつかもうと模索してゐた。有島が『或る女』以来の長編「星座」の幕あけ——「白官舎」百枚を書きあげたのは同年六月十九日であつた。

ところで彼は、この春の滞在に要した宿泊費その他として二百九十四円五十六銭をあかまん屋に支払つてゐる。家族連れであつたこと、一カ月を超す長逗留になつたこともあるが、これは講演報酬の二倍を超す金額であつた。前掲の契約ののち、大正八年

からは報酬百二十円、旅費三十円に改訂されてゐたが、その後は同額だつたようである。のみならず、彼はその報酬からかなりの額を(ときにはほとんど全額を)同志社に寄付してゐる。「大正八年度同志社報告」の寄付金品明細に「一金壹百円 文学部図書費 有島武郎氏」とあるのをはじめとして、五十円(同九年)・百円(同十年)・百円(同十一年)といずれも「文学部図書費」の寄付を続けてゐる。

こう書くとは金の捨て場につけてゐたのだらう」といふような揶揄が聞かれるかもしれないが、わたくしは別の解釈をしてゐる。有島は同志社での講演に金銭の報酬を望まなかつたのではなく、金銭以外の報酬をより強く望んだと考えられるのである。身動きのつかぬ「落潮」を自覚しつつ、ひたすら「心熱」と上げ潮への転機を求めたこの春の彼自身の述懐にそれがもつとも典型的にあらわれてゐたのではなからうか。結果は思うにまかせなかつたとしても、彼はともかくも「明日で講演は済むので一先安心といふものだ。帰つたら直ぐ創作に取りかゝる」(五月二日付 原久米太郎あて書

簡」と、《落潮》にあらがう意欲を得て帰京したのであった。

同年秋の講演は阿部次郎にゆだねている。帰京後ようやく書きあげた『白官舎』が「新潮」七月号に掲載されて続編執筆の必要に迫られていたこと、生活改革への踏切りが焦眉の課題になっていたことなどから、まとまった講演をおこなう見通しがつかなかったためであろう。彼は一刻も早くそれらの難題をなしとげて、あらたな気持で講壇に立つことを希望していたに違いない。例年の日程が近づいてきた十月九日には京都の兼松芳江あてに「此頃になつたら何んだか阿部氏の行くのが少し羨ましくなりました」と書いている。阿部次郎は、その秋十月二十六日から十一月一日までの間に、四回にわたって「ファストとメフィスト」の題で講演した。翌春もなお同じ理由から有島の講演は実現しなかった。

○講演 大学文学部科外講演として……
十月廿三日より三回に互り同所（注・神学館二階）に於て有島武郎氏の講演あり 演題左の如し

十月廿三日午後三時より 創造と

芸術

十月廿五日 同上

階級意識と芸術の問題

十月廿七日 同上

「同志社時報」二〇二号

（大正十一年十一月一日）

この秋の講演はわずかに三回であったが、聴衆の期待は大きかった。《同志社の講演は聴講者が這入り切れないで帰るものが出来る程来てくれる。僕のやうなものいふ事にもかく耳を傾けてくれるかと思ふと現代人が人知れず持つてゐるなやみが察せられる》（同年十月二十五日付 足助素一あて書簡）。大正十一年は『宣言一つ』（一月「改造」）を発表し、それを契機とした論争のち農場解放（七月十八日）に踏み切った年である。前記の岩崎博氏も会場に「這入り切れないで帰」られた一人であったが、氏ののご記憶では「共產党宣言はりっぱな詩」だ。読後の感激を語る。と、この講演についての揭示が学内にはり出されていたということである。

同志社講演の間隙をぬって、有島は京都大学と大阪毎日の文化大学講座でそれぞれ

講演している。京都大学での講演は十月二十四日（火）におこなわれたものと思われる。彼は帰京後河上肇にあてて「大学で講演してあなたにも聞いていたゞく光栄を持ち聴衆諸君からも注意して聞いて頂けた事は私の滞洛中のよろこばしい記憶です」（十月三十一日付書簡）と書き送っている。この書簡からみると、この講演は京都大学の学生が催したものであったらしい。大阪毎日の方は二十五日午後六時半から、テーマは「愛に就て」であった。

有島は二十八日夜京都を離れて名古屋に向かったが、その後十一月一日から十一日にかけて「京都日出新聞」の第一面トップに「有島武郎氏述」なる二つの文が「日出講壇」と銘うって連載された。とくにこことわられていないが、これはその秋に同志社でおこなわれた三回の講演記録であろうと推測される。各回の見出しは次の通りである。

創造と批判との調和 自然と絵画とに就て 或青年と一般芸術家との異なつた主張 何れを是とすべきか

（十一月一日）

（附）人の誇大性は生活を豊富にし

色彩付くるの効がある 自然の再生と再生の模倣を区別せよ (二日)

—— (㊦) 積極的創造性即ち誇大性と消極的創造性即自然に忠実なれとの批判との調和 (三日)

階級意識と芸術(一) 自己と外界との関係
ヘブライズムとヘレニズム 此両極をどう調和する (四日)

—— (二) 父の遺産に生活する苦痛からハタと当面した階級意識 倉田氏と私の立場 (五日)

—— (三) 火事を消してからでなければ花見は出来ぬか、火事を消しつゝ花見をする生活 (六日)

—— (四) 無産者を解放させるには教化に因るか権力に因るか 古聖人の行蹟を見よ(六) (七日)

—— (四) 同 (八日)

—— (六) 障壁を築くは資本主義者、労働者は相互扶助に生きて居る 労働階級の資本家に求むる所 (九日)

—— (七) 労働運動に指導者は無用 文化を尊重せよとの要求は如何 文化と時代との問題 (十日)

—— (八) 窮迫した労働階級に芸術はない 現代芸術は資本階級の為にする 閑人の戯れごとのみ (十一日)

有島の同志社講演はこの秋で終わりを遂げた。翌年一月十八日付の鯉江もと子あて書簡に「同志社の方を断つてからは貴地に参る機会も減じ従つてそちらがなつかしめれます」とある。彼がなぜこの時期を最後として同志社での講演を断る事になったのか、直接それに触れて書かれたものは見当たらないが、農場放棄に始まる生活改造遂行に心身のゆとりを失っていたことが最大の原因であろう。「私の生活の改革と共に思想生活の方も段々変化して行くと思ひます。この一二年はたしかに私に取つての回旋期だらうと思ひます」(大正十一年十二月七日付 木田金次郎あて書簡)との自覚から、当分の休止を申し出ていたのであつたかもしれない。同志社職員録は、文学部英文科講師としてそのまま大正十三年版まで「農学士 有島武郎」の名を掲げている。

大正七年秋からの回まで、講演のおこなわれたのは六期・延べ三十三回であった。五年間に三十三回というのは少し寂しい気もする。しかし彼は、講演の都度、いつも関心の深いテーマをとりあげ、力を尽くして語りつづけてきたはずである。講演をきかれた方々が異口同音にその感動を回想しておられるのはそれと無関係ではなからう。有島の来洛・講演は、ほかにエランヴィタルの発展や「芸術境」発刊など多彩な花を咲かせている。

大正十二年一月に警醒社から刊行された根岸橋三郎の『新島襄』に有島も序文を寄せているが、この一文が書かれたのも同志社への出講が機縁になったものと思われる。短文ながら全集未収録の逸文であるので、「置土産」の一つとして次に掲げる。

同書には、ほかに三宅雪嶺・徳富蘇峰・海老名弾正・河上肇・厨川白村が序を寄せている。それらの中で、河上肇が「新島先生は或は神となし得る人格者であらう。しかし本書の著者が、言はば西洋流に、先生を在りのままの人間として伝へんとされたことは、私の最も喜ぶところである」としているのが有島のおマージュとの近縁性を感じさせる。

新島先生の傳を公けにされる、その

ことに關して私は始めて根岸橋三郎氏とお會ひした。而して氏の難有いお心にけに色々感じ入った。私はまだこの度の氏の著作をただ一端だけ卒讀したに過ぎないけれども、著者としての氏の態度から推し考へると、故先生の風采を髣髴する上に新生面を開くものがあるに相違ないと信ずる。色眼鏡をかけて物を見るほど下らないものはない。凡ての人や事件はその赤裸々な實體に於て最上の意味を持つ。恐らくこの書はその使命をなし遂げるであらう。私はこれを著者に期待し感謝する。

一九二二・十一月下旬

有島 武郎

付記

○：終始懇篤なご教示を賜った小野義夫氏がごとし一月八日に、また岩崎博氏が八月二十一日に逝去された。ご厚情を感謝し、謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

○：また、河野仁昭・手塚竜磨両氏をはじめ、各種の資料を参看させていただき、ご教示を賜った方々にあつく御礼申し上げます。

○：冒頭のティルダあて書簡（英文）は、太田雄三氏の「有島武郎の一書簡——ティルダ・ヘックへの手紙」（『文章の解釈——本文分析の方法』昭和五十二年十一月二十五日・東京大学出版／所収）によった。ただし、太田氏がこの書簡を「訳文の形でまだ日本では一度も紹介されることがない」書簡の一つとしておられるのは誤りで、有島生馬「異国の愛人に送った有島武郎の恋文——秘められた十八年の愛のすがた」（『婦人公論』昭和四年五月に訳載されており、山田昭夫氏によつて後掲の資料集（中巻）に収録された。

○：『日出講壇』の講演記録はこれで完結しているのかどうか今のところ未確認である。各回の見出からも明らかになように前者は「描かれた花」（大正十一年七月）および「人間は誇大する動物である」（同八月）と同趣旨であり、後者は「即実」および「静思」を説いて倉田氏に——同時に自分の立場を明かにするために——（同年十一月・十二月「泉」と重なっている。「即実」は京都からの帰途、十月二十八日に名古屋でおこなった講演の記

録であるからこの方が一足先のものということになる。

○：『有島武郎全集』（叢文閣版および新潮社版）ならびに山田昭夫氏と共編した『近代文学資料8・10 有島武郎 上・中・下』（桜楓社刊）所収の資料については注記を略した。

写真について

○：冒頭の写真は、瀬沼茂樹編集解説・日本文学アルバム15「有島武郎」（昭和四十四年六月・筑摩書房）より。

○：大島豊にあてた有島の葉書は、大正七年四月十日（消印）のもので、改訳新約聖書を贈った大島への礼状である。小稿「有島武郎の大島豊あて未発表書簡二十七通そのほか」（昭和五十四年十一月「文学」）を参照していただければ幸である。

○：原田助（社長）にあてた有島の書簡は大正八年一月二十五日（消印）のもの。同年一月に辞任した原田への見舞状である。前掲の『近代文学資料9 有島武郎・中』に全文が復刻されている。

（昭和四十九年同志社大学・大学院修了
平安女学院短期大学助教授）

同志社の煉瓦造建築

——重要文化財指定を機に——

近藤 豊

はじめに

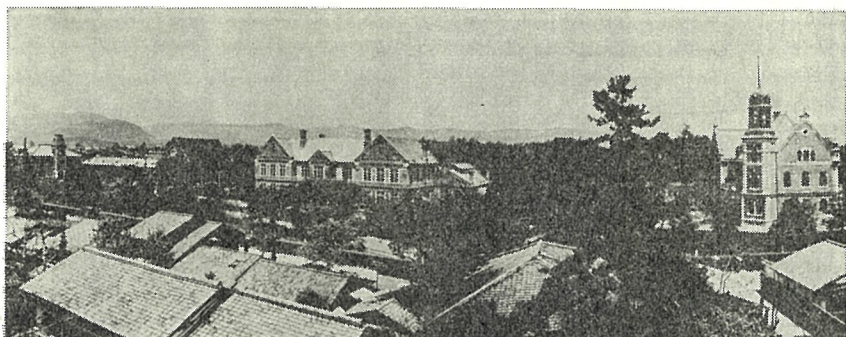
京都にはいわゆる洋風建築が数多く残されていて、「明治建築の宝庫」などと言われることもあるが、そうしたなかで先ず指を屈するのが同志社関係の諸建築である。京都市内で最古の洋風住宅は明治十一年竣工の新島襄先生の旧宅であり、また学校建築にはこれも現存煉瓦造建築では京都最古の彰栄館がある。しかしこうした個々の住宅や学校建築というだけなら他の地方でも多く見られるところである。しかし同志社の場合は違う。個々の建築が離れて別々にあるのではなく、群をな

している。重要文化財の建築だけでも西から東へ彰栄館・礼拝堂・理化学館・旧神学館、それに有終館と煉瓦造建築が並んでいる。このように、煉瓦造建築でいわゆる「町並」をなしているところは今では同志社を指して他にはない。今ではこうした煉瓦造建築のほかに新しい校舎も多く建てられたが、昭和二十年過ぎまではそれ等もなく、南側の前面の広々とした校地には老樹の影が落ち、静かな落付いた景観であった。昭和初年ごろは礼拝堂と理化学館との間に花壇が作られ、いつも眼を楽しませてくれたし、その頃は立志館（木造、平家建、いま亡し）の前あたりに横に長

く枝を張った老紅梅が春を告げ、神学館の東の庭などにはウマノアシガタが沢山生えていて、昼休みの時間には合唱の音が流れ、楽しかったのを覚えている。が、過去は過去のこととして、今回追加指定された諸建築について以前に調べさせてもらった処を記すことにしたい。

彰栄館

上述のように京都で、また同志社で最古の煉瓦造建築である。構造形式は煉瓦造二階建、寄棟造、棧瓦葺、東向き、正面中央に塔屋を付けている。規模は桁行（南北）六三・八五尺、梁間四五・〇〇尺（煉瓦壁真々で）、建坪八三・四六、延坪一七一・八一坪である。この建築計画が行なわれたのは、『新島襄先生年譜』（昭和三四・一一、同志社校友会刊、以下『年譜』と略称する）によれば明治十六年（一八八三）五月で、『年譜』には「……この月（五月）、宣教師会に対し同志社に煉瓦造校舎老棟の必要を訴え、アメリカン・ボードの援助をもとめたところ、ボードの承諾するところとなり七千五百円の寄附を受ける」とある。この設計関係者、グリーン師



明治末年頃の同志社 有終館の屋上ぐらいから見たものであろう。左の彰栄館から神学館までが見える。手前の民家は教職員の住宅かと推定される。

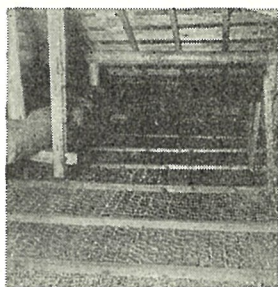
(Daniel Crosby Greene) については年譜の明治(以下同)十五年二月六日の項に師が「…横浜より来京の免許状下付、同志社に迎えることとなる」とあり、既に来日されていることが知られる。かくて新築へと着々進行、十六年十月十七日建築工事入札の結果、辰所菊太郎に落札七千五百円にて着手に決った。彰栄館建築工事はこうして同年十一月上旬に始められ、十二月二十二日に定礎式が執行された。その石が今東南隅に見るところのものである。翌十七年には「…九月、建築中の煉瓦建校舎竣工につき十七日をもって献堂式を執行し、彰栄館と命名」されたのであった。そしてこの約一年後には礼拝堂、有終館の定礎式が行なわれる手順となったのである。

竣工の彰栄館は上下とも四室の計八室から成り、東正面が時計塔^(注?)の聳える煉瓦造の、壁体の隅や窓まわり等には花崗岩を用いた、当時は人々の眼を見張らせる建築だったと想像される。塔をもつ煉瓦造建築はこれよりさき、京都駅の本屋が明治十年にできているが、意匠の上から見ても彰栄館の方が数等すぐれている。時計塔内には洋鐘が吊られてい

るが、その音は遠く京都駅まで聞えたという。騒音や公害のない当時は風向によってあり得たことで、決して誇張ではなかったろうと思われる。

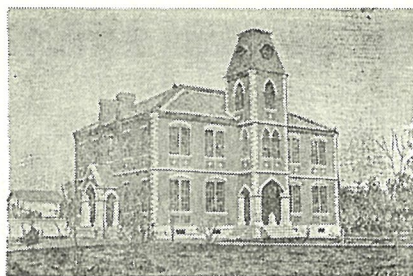
平面では下記のように上下階とも四室が中心で、階上へは南側から上るように階段があり、その関係で南側二室は別々の暖炉を必要とするので屋上に二本の煙突が設けられ、窓配置もこれに合わせている。窓は南側で上下階を通じて五、北側では四、東側の正面では時計塔の左右にそれぞれ二組の二連窓が取られ、西の背面もこれに應ずる。これ等窓の上部は煉瓦で緩く弧形に起らせ、その上にはこれに応じた欠円弓形の花崗岩を入れる。開閉は分銅付の上下窓で当初のものがよく残されている。時計塔の部分は三階建て窓は尖りアーチを用い、最も大きい特色の一つとなっている。その三階の窓だけは外側に鍍戸^{はくこ}を付けているが、これも当初の姿をよく伝えていることは古写真から知られる。

外壁の要所には花崗岩を入れるがその他は足元部分を除き煉瓦で、いわゆるイギリス積みであるが、長手四段に小口一段を挟んでいる。この積方は礼拝堂が同類で、全く同じでは



彰栄館の天井裏

漆喰天井裏はこのように細かく木摺が打ってあった。



彰栄館

創建の時のエッチングで今も大改造はない。

げている。在来の手法を最もよく現しているのは小屋組で、周壁の煉瓦壁上に軒桁を廻し、これに梁を仕掛ける。小屋組の南半は複雑なように見えるが、それは太い拵木（横杆の理により垂下を防ぐ材）を二本入れ、その尻を杵吊りとしているためで、これは南にある階段西側の現状変更が工事中か、さもなくば極く早い頃に行なわれたためと推定される。小屋内では棟札などは見られないが、墨書番付は達筆で書かれ、大棟下方の束には南



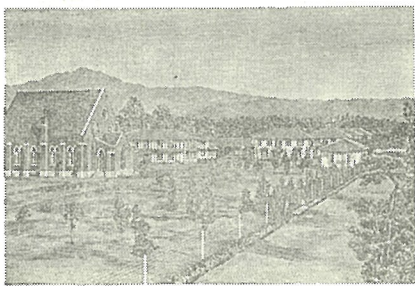
ないにしても造営年代が近いことを示している。屋根は寄棟造で起り（上方に凸）をもち棧瓦葺で当初は各屋根根面の輪部に沿うた部分は白漆喰で押えていた。このような屋根は内部の小屋組（屋根を支える構造）が純和風なのと共に在来の民家などと全く同じで、明治初期の洋風建築に多かった、わからない所、見えない所は和風の構造、手法に拠っており、在来の棟梁の作であるのをよく示している。間仕切も煉瓦壁でなく、在来の木舞壁でそれを白い平面に仕上

方のに「辰巳頭、未申頭、ち八」、北方のに「丑寅頭、戌亥頭、ち十三」と書かれている。また母屋桁には「小島」の焼印あるものがあり、極裏板にも判読困難だが達筆の墨書がある。時計塔三階内部は煉瓦壁の内法東西九・六〇、南北九・七四尺で、天井は繰型付の漆喰天井に仕上っているので何かの一室として使ったのかも知れない。この塔内には洋鐘が吊られ、それには一つの面に

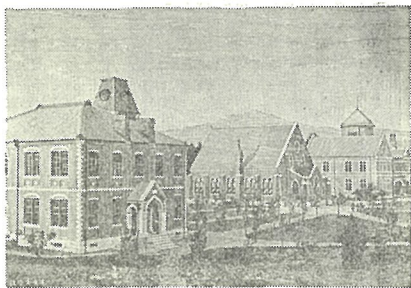
THE C. S. BELL CO [30] HILLSBORO, O., 他面 No 30 YORE と陽鑄しているが年記はない。

階上、階下の四室は大体同じで、各室とも一隅に暖炉を設けていた。壁及び天井は白色漆喰仕上げとし、天井廻りには簡単な繰型を付ける。天井は約二寸に四分の木摺を細かく打ち、その木摺に細い藁縄を巻いていた。階段は南から上るが、傾斜に沿って徳利形の手摺子を入れるが、親柱は簡単なものである。

この階段を昇りつめたあたりの左側（西側）は工事中かごく早い頃に間仕切が変更されたらしく、小屋内の拵木を入れたのもその為と考えられる。現状では階段上部や手摺子などの納まりが不自然なことになっているが、こ



礼拝堂のできた頃の情景



理化学館の天文台が見えるから
明治23年頃の景観であろう。



「教育は宗教と密接の関係あるものにして基本は宗教にありといふべし……わが同志社教育は実に基督教と密接の関係あるもの……この礼拝堂はわが同志社の基礎となりまた精神となる」(広津友信記)とあり、礼拝堂の重要さが偲ばれ

で、ほかに正面玄関・後陣及び木造の控室兼出入口が付いている。建築時期については『年譜』によれば明治十八年十二月十八日午前九時半より定礎式が行なわれ、

彰栄館の東に南面する。煉瓦造、一階建、一部中二階及び地下室付の建築で、屋根は型押の鉄板葺である。主要部正面四六・六〇尺、側面六一・六〇尺、建坪九八・九九坪(他に中二階がもとは二三・六一坪)

礼拝堂

これは中学の高学年の教室として使われていた頃から、このあたりが何となく狭く感じられていた感じていた処である。しかしその材質を見ても当初材と殆ど変らないので、この変更は早い頃に行なわれたと見られるものである。^(注4)

る。また同日十一時より図書館(現有終館)の定礎式も行なわれた。礼拝堂も図書館(以下有終館という)も工事が始められた時期はまだ資料を見ないので不詳である。工事中の事情も不詳であるが礼拝堂は翌十九年六月二十五日に献堂式を行なっている。設計には彰栄館と同じくグリーン師が深く関係指導したと考えられ、工事監督は後の下村孝太郎工学博士と伝えている。^(注6)

同志社で二番目にできた煉瓦造建築の礼拝堂は切妻造で妻を正面に見せた、簡素ではあるが意匠のすぐれた建築で外廻りの出隅及び窓間には煉瓦積の控壁をつけている。正面玄関中央と左右、それに主屋両側面などの開口部は要石のない尖りアーチ、また正背面上部には花崗岩円形の輪郭内に大円窓を開く。両側面には高く煙突を築くがこれは昔、地下室に置いた暖房用ストーブのものである。屋根勾配はきわめて急で、軒高約二一尺、棟高同四八尺にも及び、当初から金属板(鉄板?)葺であった。外観内部とも当初以来甚だしい変更を受けず、よく当初の姿を残している。が、以前は玄関も主屋大棟も全長に鋳鉄製の棟飾りがあったが、明治末大正の頃取去ら

れ、今はこれが見られない。基礎は花崗岩積みであるが、煉瓦積と共に石灰モルタルを用いている。正面両側控壁の石に「明治十八年十一月」(西)、「A. D. 1885」(東)の刻銘があり、定礎式に先立ってこの石が据えられたのであろう。

内部は広い一室が主で、正面大きい矢張りアーチの下から高い壇が築かれ、この部分は言わば後陣に当る処で、半八角形状に張出している。壁面は白漆喰塗り、両側面は尖頭の細長い窓を二つずつ吹寄せに開き(玄関、後陣部は一つ)これ等は木造のステインドグラスを模した組子入りのもので、赤・橙・青・緑などの色ガラスを入れているが、これは上部の大円窓も同じである。当時日本人は本式のステインドグラスの技法を知らず、指導をした外国人(グリーン師)が工事担当の工匠の知恵でこのような意匠ができたのであろう。この木造によるステインドグラスは見込の深い檜の良材から出来ていて、大円窓では八弁の花形として薔薇窓の気分を巧みに出している。昭和初期、大正末ごろは土曜の第一時限に全部の生徒がこの堂で聖書の話などを聞いたが、東側の窓から朝の日光が赤青緑の線と

なつて入つて来て特殊な雰囲気であつた。

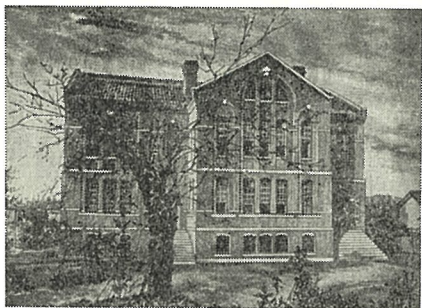
次に内部で注意されるのは屋根まわりの構造で鉄板葺の關係もあつてごく簡単な小屋組であり、それはヨーロッパのゴシック時代の様式を適用したもので水平材は壁面から出る榼梁と母屋桁の類くらいで、その他は斜材、垂木、組構造に近く、鉄小屋組といわれるものである。これ等の構成材は母屋桁と共に大きな面を取り、面は朱、その他は墨を混ぜた紅柄を塗るが、これも工匠や指導者の創意であらう。屋根の裏板を斜め張りとしたのも古来から少なく、この方が合理的である。当初の室内の照明は東寄りに円形極彩色天蓋付のシャンデリア型のランプ、また西寄りにはランプが吊られていたことは古写真から知られる処である。正面の大きい矢張りアーチは今のような線型なく、元は簡素なものであつたが形は大きく變つていないようである。後陣正面に新島先生の肖像が掛けられ、その前にある聖書机・説教(講演)用机なども櫨造りで、当初か、それを去ること遠からざる頃作と見てよからうと考えられる。これ等には三ツ葉型が削り抜かれているが、それは後陣正面上部に開けられたものと共通した形をも

っている。

以上、礼拝堂について概略を記したが、彰栄館では純然たる和小屋であつたのに、礼拝堂では合理的な鉄小屋組を用いた処は数年ならざる間にも拘らず著しい進歩をしたことを見逃がさないようにしたいものである。

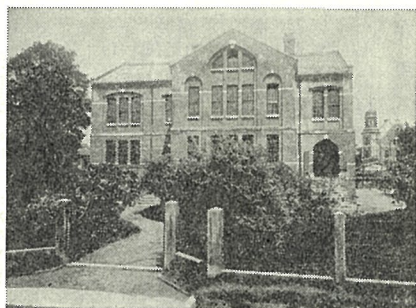
有終館(旧図書館)

同志社の煉瓦造建築が彰栄館から東へ礼拝堂、理化学館、神学館と並んで、いわゆるアメリカンゴシック様式からイギリス風、ドイツ風の各特色を見せている景觀は他で求められないが、有終館はこれ等とは並ばず、少し東南の方にある。煉瓦造二階建ではあるが、半地下室および屋根部屋があるので實際は四階建くらいの高さをもつ大建築である。平面はほぼ十字形をなし、延三三四・九四坪(地階一〇七・五九、一階一〇九・〇〇、二階一〇六・〇〇坪で、他に附属建物がある)。当初図書館として建てられたが、この建築についても資料が乏しく、礼拝堂と大体平行して工事が進められたと推定できる程度で、定礎式は礼拝堂のそれと引続き同日に行なわれている。設計もグリーン師と伝えるだけで、明



有 終 館

南の正面のエエチング



有 終 館

南側の正面はもとはこのように広がったが、電車開通で狭くなった。

その左右七七・六六尺（壁真々にて、管繕課実測寸法）であるが、大正六年今出川通電車軌道を設けるため南の敷地が削られ、南の正面が狭くなり、現状のように東正面のような姿になった。このようにして主要出入口が東に移る前は南面凸出部両側に二箇所の石造階段をもっていたが、この時南面東方の階段を東側に移した。外観上当初との最大の変化はこれと、屋上の煙突が取去られた事である。全形は十字形の平面に合わせてその突出部に切妻をおこし、半地下室と一階、一階と二階との間および窓上部などに花崗岩を入れ

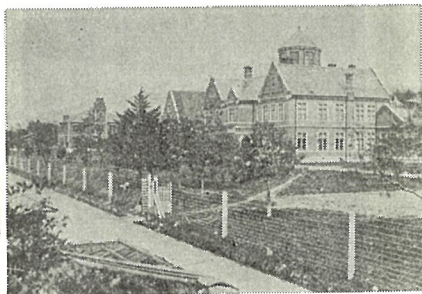


治二十年十一月十五日に図書館開館式を行なっているから、この頃に竣工したものであろう。その後、図書館のほか法政学校・専門学校・大学英文科・大学予科の教室などに用いられ、昭和二十四年から本部署務室となり現在に及んでいる。

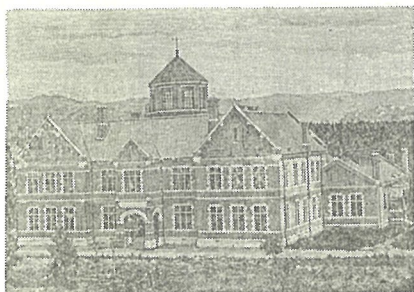
有終館の建築年代の直接資料には基礎南西の東隅に「A.D. 1885、石階段脇に「明治拾八年十二月」の刻銘がある。本来は南が正面で

て赤白の色彩効果を出しているのは彰栄館以下の建築と同じである。四階建ほどの高さのこの建築は竣工のころは京都最高最大の洋風建築で威風堂々、遠くからもよく仰がれたと想像される。

しかるに昭和三年秋、出火のため内部床、天井、屋根等が焼失した。その後補強復旧されたがその際内部間仕切その他が変更され、いま当初の姿を伝えているのは内部のごく一部と外観に過ぎない。この火災後、同志社当局は取毀ちの方針であったが、武田五一博士から修理、補強保存の勧めがあり、それに従ったので、現在までよく伝えられて来たのであった。このような補強修理を施して外観は古い姿を残すというやり方は、いまや世界中で行なわれており、後述の理化学館もこの方針で修理が終ったものである。有終館の修理は外壁の煉瓦積内に約一五センチ厚の鉄筋コンクリート造の内壁を造り、ボルトで緊結した方式で行なわれた。外回りの窓は南面開口部は尖りアーチ、半円、弧形アーチを混用、他の面はやや簡単である。ただ彰栄館、礼拝堂には見なかった要石^{（注8）}が入っている点が違っている。屋根は当初段葺^{（注8）}（鍔葺）^{（注8）}のよう



明治24,5年頃のハリス理化学館



理 化 学 館

竣工後間もない頃の姿で天文台がある。

であったかもしれない。明治末頃の写真では
棧瓦葺で切妻近くに丸瓦二本を伏せている。

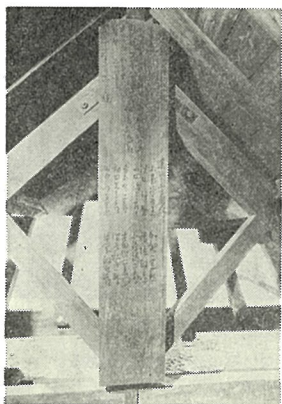
ハリス理化学館

彰栄館、礼拝堂、有終館とともにアメリカンゴシックと武田五一博士が名付けられた様式であるのに対し、ハリス理化学館は設計者もイギリス人のハンセルで、イギリス風である。

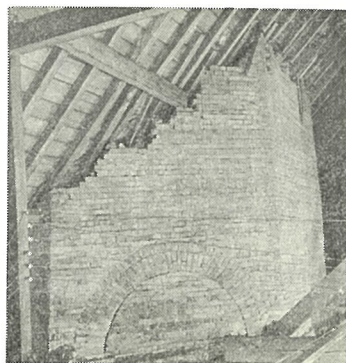
ハリス理化学館（以下理化学館と略称）は礼拝堂の東に南面する英国中世式のおだやかな表現をもつ建築で、煉瓦造二階建の主要部と、もとは東北に平家建実験室（今亡し）とからできている。二階建主要部は東西一五・七〇尺、南北五八・九〇尺で、主要部は凡そ王字型平面をなし、南正面は規則正しい対称形、左右に切妻を大きく見せ、中央に車寄^{（注9）}を突出、これも小さい切妻として正面形を纏めている。車寄上部は円形アーチ、窓はすべて矩形窓で二連又は三連の上下窓、基礎や開口部、切妻部分などに花崗岩を入れて赤白の色彩効果を出しており、煉瓦もイギリス積である。この建築は元来アメリカの紳商、ハリス商会社長、ハリス（Jonathann. Harris,

1835—1896）の寄附で、日本の同志社にキリスト教主義による理化学校を設立しようと十萬ドルを寄附されたことに始まるもので、この実現についてはラーネッド博士がハリス氏と同郷であり、博士の懇請が奏効したもので、それですす明治二十二年五月に一万五千ドルの寄附を受けたという。その後数回にわたり寄附の追加があり、理化学学校設置の第一事業として明治二十二年秋頃には設計計画も終り、基礎工事も始まったらしく、西南隅に「明治二十二年、A. D. 1889」の刻銘がある。この定礎式は『年譜』によると二十二年十一月十五日に行なわれている。その後工事は順調に進んだらしく、翌二十三年三月二十六日上棟（車寄内部の棟札、昭和三十五年十二月二十二日発見）、同年中に竣工、開校式を挙げたようである。

この建築は最初から理化学教育を行なう学校として出発したので当初からその表現が見られ、車寄正面の全長に亘って嵌められている花崗岩の大きい石にも「SCIENCE」の文字が浮彫り文様と共に現されている。そうしたことから当初は屋上後寄りに八角平面の天文台があったが、竣工の翌年、濃尾大地



理化学館の棟札



理化学館天文台の痕跡
今はモルタルで塗りつぶされた。

明治二十二年 AD 1889.

震の後、危険状態となったので、
取除かれた。その痕は屋根下に一部が残っている。結局、天文台は二年足らずしかなかった事となった。その他外観では背面北流れの屋根に出ていた煉瓦造煙突が雨漏りが多いとの理由で取去られたり、近年まであった平家部分の実験室が除かれたりしたが、その他はよく当初の姿を伝えている。

内部は今回の補強と改造工事によって旧態を止めないが、正面車寄内の階段室における壮麗な階段は保存された。総構造りの甚だ立

派なもので、京都では龍谷大学本館内のそれと共に最優作である。その親柱や手摺子などにハンセルの設計である癖が出ており、同氏がこの後に設計したと推定される平安女学院明治館のそれとも酷似している。この主階段の西側はいま一、二階とも細かく間仕切られているが、もとは夫々二室程度であった。階上には加藤延年先生の苦心蒐集の動物その他の標本が一杯あったのを覚えている。小屋内へは別の螺旋階段から入るが、小屋組は瓦葺にも拘らずごく簡単で、対東小屋組、一部真東小屋組で屋根勾配は殆んど矩勾配（四十五度）である。筆者はこの建築の設計者が何人であるかを知らたく思っていたが、昭和三十

同志社ハリス理化学館

建築委員 ラルネッド

下村孝太郎

金森通倫

大沢善助

兼建築係

耶蘇降生一千八百九十年

寄附者ハリス

裏

建築受負人

小島佐兵衛

加地定助

浦田佐助

稲垣政造

山田源二郎

小嶋鏡二郎

吉野竹二郎

生田源右衛門

初田岩三郎

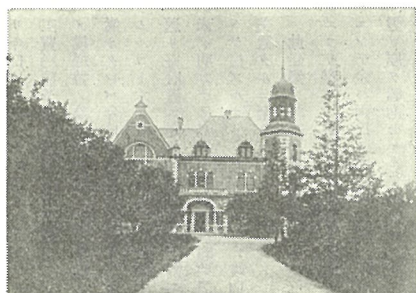
渋谷松五郎

田中卯兵衛

片岡政太郎

建築師 ハンセル
監督 谷口八兵衛

明治二十三年十月廿六日上棟



神学館正面

まわりは広々としていた明治末年頃の撮影であらう。屋上に並ぶ屋根窓は今はない。



五年十二月二十二日、小屋内を調査させてもらった時、車寄上の小屋内で大きい棟札を発見した。檜材で正面向き（南）に打たれ、前ページに掲げた墨書がある。

これによりイギリス人ハンセルの設計その他が判った。建築師ハンセル (Alex. N. Hansell) は明治二十年に來日の建築家だ、一八五六年北フランス、カーンで生まれ、イギリスで五年間有名建築家のもとで修業し、日本には大正九年までいたという。なお棟札の初田岩三郎は多分当時セメント製造を行なっていた初田岩次郎の一族ではなからうかと考えられる。

以上が理化学館の概略であるが、彰栄館から東へ進み、理化学館に至ってイギリス中世風の様式となり、さらに東してドイツ風の旧神学館となるなど、他では求められない情景である。そのなかで理化学館はおだやかな表現をもち、いかにも大学で勉強するのにふさわしい建築という感じが深い。屋根勾配は急であるが、軒近くで勾配を戻して折線を造っている処にも特色が認められる。正面切妻は煉瓦積の上に勾配に沿って花崗岩の見切りを恰も民家の卯建のように造り、大棟端には同

石材で萱型の棟飾りをあげている。屋根は棧瓦葺であるが、棟の雁振瓦は在來のと違い特殊なものを用いている。

クラーク記念館（旧神学館）

ドイツ式の塔がまことに印象的なので、同志社のシンボルのようになっていた神学館は彰栄館以下の並立している煉瓦造建築のうちでは最も後にできたものである。この建築はクラーク夫人の寄附にかかるもので、詳細には「クラーク神学館」という。その関係資料としては『同志社年度報告』というのが保存されており、それによって多少は判るものである。すなわち『報告』の『同志社明治廿四年度報告』（二五・六・一八刊）に

「……爰に吾人の大なる喜びとして記すべきは昨年七八月の交に当り米國ニュウヨーク州ブルークリン府のクラーク夫人が同年一月病死したる其亡児の記念として神学館の爲金貨一万弗を寄附したるにあり……」

と見え、また同『廿五年度報告』には

「くらるく夫人其亡児ノ記念トシテ神学館新築ノ爲金貨壹万弗ヲ寄附シタルコトハ前年ノ報告ニ記載シタルガ其后直ニ之ガ新築ニ着手シテ六月十三日縄張ヲ爲シ十一月四日定礎式ヲ行ヒ着々進メツツアルナ

リ今日ノ処已ニ七分通りハ出来シタリト云テ可ナリ
工費總額予算ハ壹万四千円許ナリシモ地ナラシノ為
メ模様替ノ為メ其他種々ノ予算外ノ支出アリテ費用
嵩ミタレバ今日ノ処到底壹万弗ヲ以テ竣功ニ至ラシ
ムルコト六ヶ敷カルベシ 依テ此事情ヲ明カニ申シ
送り寄附者ニ向テ其額ヲ依頼シ置キタリ 此事成否
未ダ明カナラザレドモ多分目的ヲ達スルニ至ランコ
トヲ信ズルナリ 此建築ニシテ竣功セバ校中第一ノ
美觀タルニ至ラン

此建築ノ設計ハ東京明治学院ノらんです氏ノ紹介
ニヨリ専ハラ独逸人ゼーる氏ノ工夫計画ニ因ルモノ
ニシテ余ハ両氏ノ厚意ヲ以テ我校ノ為ニ尽サレタル
勞ヲ厚ク感謝セザルヲ得ザルナリ

また翌『廿六年度報告』には

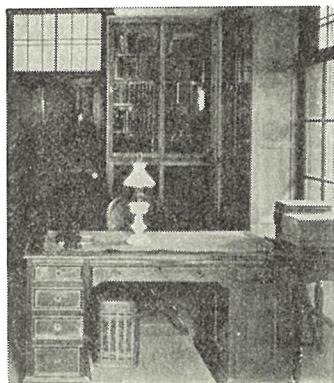
「……一昨年来新築に従事セシクラーク神学館は昨
年に至り大に其工事を進め四月八日を以て上棟式を
行ひ夏期休暇の末に及びて略落成せり 故に第一学
期の始より其教室を使用し内部の裝置等に至るまで
悉皆成就するを待ちて本年一月卅日其開館式を執行
せり 此好期に乘じ近府県に在る教授者及教会諸
氏をも招待して我神学校と実地伝道に従事する諸氏
との間柄をして益々親密ならしめんことを力めたり
屋間には本館建築に親して初より大に尽力せられた
る湯淺治郎氏の報告あり 又宮川経輝アルブレクト
二氏の演説あり 夜に入りては更に神学校員及來賓
諸氏の懇親会ありて晝夜共に甚だ盛會なりき」
右のよつな次第でクラーク記念館は二十六

年に竣工した。煉瓦造二階建、西南隅に塔を
もつ建坪一〇・六六坪（二階一一四・六二
坪、三階四・五七坪、塔屋一・九七坪）、軒
高約三四・九尺のドイツ復古様式の建築であ
る。この敷地はもと沼池だったらしく、地盤
が軟弱で煉瓦造建築の爲には案外基礎工事が
嵩んだことが『年度報告』からも想像され
る。しかし昭和二十年過ぎまでは特に大きい
欠陥も出なかったらしく、外観では西正面に
二つ並んでいた屋根窓が昭和六、七年頃に取り
去られた以外、大変更はなかった。しかし数
十年前頃から東南隅の小塔が壁面の亀裂など
により落ちる心配が出て来たので、支えの控
壁が造られた。また内部でも殊に二階の各室
は新建材で模様替が数年前に行なわれてい
る。西を正面とした外観は左右形を異にし、
中央寄棟造、急勾配の屋根、左が切妻、右が
三階とその上に塔がつく塔屋で、高さや幅が
うまく均斉が取られて美しく、花崗岩と煉瓦
の赤白の色彩効果は他の諸建築と同じく印象
的である。開口部の上部は半円形アーチで、
尖りアーチは使われていない。西南隅、塔屋
の基礎部に「明治二十五年 A. D. 1892」と
大きく彫られている。

内部は一階に五室あり、正面中央は広間兼
階段室、二階は小室三のほかに講堂兼礼拝堂と
しての広間がある。この広間は本来木造板張
りの一種のボールト天井であるが、現在はその
の下に新建材による天井を張っている。この
天井を見ても大胆な構造が用いられており、
小屋組は未見であるが、やはり大胆な構法と
推定される。其他の室は白漆喰である。窓
は透明ガラスが入れられているが、最初の計
画ではステインドグラスにする予定だったら
しく、また照明器具も電灯を下げていたがこ
れも本格的なものにする計画だったという
が、これ等は現在まで実現せずに終ってい
る。結局、神学館はドイツ式意匠で纏められ
た名建築ではあるが軟弱な地盤に建つことや
構造上の大胆さなどのため、将来の根本的保
存修理の待たれる建築であると言えよう。

附、新島襄旧宅

以上、同志社校地内における明治初・中期
の煉瓦造建築を概観して来たが、同志社関係
では今一つ見逃がせない古建築がある。それ
は校祖新島先生の旧宅で、明治十一年（一八
七八）の洋風住宅、そして京都における最古



先生の書斎

(先生在世の時のまま保存されている)



新島旧邸

(明治11年—1878—竣工)

の洋風住宅でもある。この住宅は上京区寺町通丸太町上ルにあり、十一年五月に新築届、同九月に竣工、建築資金は新島先生の在米中の友人、シアース(Sears)氏より寄附されたものである。木造二階建、主要部は三七・二〇尺に四一・四〇尺、それに平家の居室数室、台所、物置などが附属している。この主要部は一階二階とも東南西の三方に縁を繞らした真壁造で、南の縁は特に幅広くとられている。この上下階ベランダ形式は和風コロニアル様式とも言うべきもので、シアース氏からこの形式が衛生上から最良との助言があったらしい。が、当時神戸や大阪などに建てられた洋風住宅の影響があったことも想像される。屋根寄棟造、棧瓦葺である。

内部は一、二階とも大体田の字型の四間取りで一階は最大の応接室と書斎・食堂および居室(その一部が茶室になっているのは八重子夫人が造られたという)、二階は先生夫妻の寝室や居間で、元は一室を除き板敷で、椅子・寝台が使われ、一階と共に総て洋風であった。(同志社総長故牧野虎次先生より直接うかがった)。各室多少は後の変更はあるが、少なくとも一階の書斎は先生在世時代と殆ど

変わらず、アメリカ家具類なども当時のを遺していて貴重である。(これも新島先生在世時代を知る牧野先生談)。天井は紙貼で新島家の定紋、竹紋を漉き出した処もある。

この旧宅は初期洋風住宅としても貴重である。コロニアル様式をとりながらも真壁造であるのは京都の棟梁では木造大壁が馴染み浅かった為か、または費用の関係かも知れない。鎧戸にしても二階は蝶番吊りの両開きとしており、一階は一本溝で中央から引開けとしており、その上の欄間も民家などのそれに同じである。暖房は一階応接間に簡単な鉄製の装置があり、その煙突は屋上まで延びて一階と同時に二階も温まる方式で、これは当時最新方式だったかもしれない。なお附属屋にある便所は木造の洋風腰掛式便所で此種の最古のものの一つであろうことも注意したい。

むすび

以上、同志社の煉瓦造建築で重文に指定されたものと新島旧宅について記したが、同志社にはこれ以外にも明治大正昭和亘る代表的建築が多い。また取壊されたが明治末にできた立志館や旧華族会館なども歴史に残るも

のである。これ等についても記録に留めておきたいものである。最後になったが昔から何回となく建築の勉強調査に出向いてその度ごとにいろいろ御配慮いただいた同志社関係のかたがたに厚く御礼申し上げる。

注 1

この「辰所」については原資料では「瀬」の草書に近く、「辰瀬かも知れない。田中良一先生は「辰瀬菊太郎」と訂正された。

注 2

この塔は時計があるから、時計塔であるが、内部に洋鐘が懸っているから時計塔兼鐘塔であるが、茲では時計塔としておく。

注 3

ハリス理化学館の棟札には建築受負人に「小島」姓が二人あり「小島佐兵衛」と「小嶋鏡二郎」とある。この「小島」も焼印に見える人たちかもしれない。

注 4

今回の修理で部分解体の結果、この点が明らかになって来た。それについては同志社時報六四（一九七八）に前久夫氏の考察が載っている。

注 5

以下の寸法、面積などはメートル法で表すべきだろうが同志社営繕課やその他の古い資料にあるのは在来表現な

注 6

ので、それによることし、換算はしなかった。

『年譜』によれば明治十八年十月には下村氏は米田 Worcester; Mass; にあって勉強中とあり、どの程度工事監督をされたかは詳かでない。

同氏は同志社第一回卒業生の一人である。

注 7

現在は内部床張りとそのに置かれる椅子、照明器具などが新しくなっている。

注 8

『新島襄先生之伝』デビス著、明治二四・一、所載図による。

注 9

この凸出部は玄関と言ってもよからうが、内部小屋内の母屋桁に「車ヨセ」の墨書があるので、この名に従った。

注 10

この痕跡は今回の修理前まで煉瓦積のまま残されていた。八角の外法で約二九〇センチ(各辺不同)であったが、修理後はモルタルで塗りつぶされた。

注 11

明治館の階段親柱は上が切り取られ、意匠が崩れているが、害あって益なき無理解の破壊行為といふべきである。

注 12

この棟札は中心の高さ一七七、上幅三七、下幅三二、厚さ四(単位センチ)はどで、洋釘で打たれていた。上肩は

注 13

両側とも少し切り取られている。

ゼール氏については『明治工業史・建築篇』に「其の後エンデビヨクマン建築事務所にては東京の失敗に驚き更に実地家なるゼールを派遣し上席技師と為せり。同人は明治二十一年十二月着京、妻木頼黄と共に裁判所建築にも従事し、旁司法省の工事も携れり。されば前に来り居りしステヒミラー以下とゼールとの折合悪しく、ゴタゴタの内ワイトマン及びメンツ先づ去りたり。これ雇傭期満ちし故なり。次いでステヒミラー及びムテジウスも去り残りはチーツエとゼールのみなりき。」とある。

注 14

近年神学館の設計図面その他の資料が見付かり今回これ等も重文の附指定となった。

(摂南大学建築学科教授 昭和三年同志社中学卒)

弱視用大活字本の 刊行をめぐる

弘 英正

弱視用拡大図書の関係術語の中で、フェルトペン等で手書きしたものは拡大写本と呼ばれて久しいが、原本を大きい活字で組みかえた本は、図書館問題研究会が大型活字本と呼び、私どもどちらか工房が大活字本と呼び、そのいずれもが、まだ定着していない。それはとりもなおさず、運動の現段階の反映であります。そして、一職人集団でしかない私どもが、そのほぼ全般にわたる目配りと模索を余儀なくされていきます。同大、同女大をはじめとする各専門セッション、有志の個人の方のご助言を、切に願う所以であります。

私どもの運動の大前提は、健眼者が享受している読書環境と平等な弱視者のそれを整備することであり、

①著作権に関して 従ってそれはオリジナルでなく、既刊のすぐれたもののコピー

を提供するものである以上、著作権の問題が必ずからんでくる。今まで接触した各版元からは幸いに快諾を得たが、財産権に対する抵触（点字本と同等の社会的認知をめざして、版權使用料の無料扱いを一貫してお願ひしている）、著者・版元の創作行為の果実を利用させてもらうというしるめたさ（読書権という概念が叫ばれつつあるが）がつきまといっている。また、今後必ずしもスムーズに進展するとは思えない。

イギリスでは一九六八年に図書館協会が、レイアウトに関して全国的なシステムティックな調査を完了しているという『印刷界』一九七三・四。ハワイ大学は「Large Print」を一五〇〇タイトル蔵するという（知人談）。そのような量と層をもった諸外国において、この問題についての一定の慣行、ルールが成立していると思われる。その事実と方向性のご教示お願いします。

②レイアウトに関して 弱視の場合の「読める」ということが、従来ともするとそうであったように、ほとんど視距離ゼロの、鼻づらをこすりつける体のものであってはならない。それは苦行であり、読書は

（特に弱視児にあつて）苦行であるべきでない。弱視者が軽くひじを伸ばして本を読むにふさわしいレイアウトの権威ある基準がまだ日本にはない。

学習転移で市販の本が読めるようになる可能性を捨てないとするれば、明朝体系がいい、細明はやはりちらつくので太明がいい、と従来されていた。私どもが太明で本を作った時、写植の現像管理に失敗して、ハレーション寸前のものを作ってしまった。それを印字しなおす経済的・時間的ゆとりを持たなかったため、そのまま印刷し、失敗で、とあやまりながら渡していったのだが、読者の反応はそのハレーション寸前の太った字に好評で、ノーマルなものは横線がちらつくということだった。この「失敗」に学んで、私どもは横太明を用いることを主張することができた。しかし試行錯誤には限度があるので、総じて可読性に対する、システムティックな調査を切望します。

③頒布方法に関して 現在は直送、運動体委託の形をとっているが、健眼者と同等な読書環境、という以上、弱視者が書店

の一角で本選びを楽しみながらしばし迷う、立ち読み風景をも現出せしめたいと願っています。

以上、大活字本の問題点を報告し、それに対するご教示をお願いしたが、更に、特に大学の先生方にアピールがあります。

一般書大活字本の刊行部数は、現在千部が限度。専門書においては、まずその刊行の可能性はありません。従って、先生方の著作を公刊される折、弱視学生の便を考え、次のミニマムを満たしていただきたいと思います。

①白黒が明確なこと

②活字が大きく、肉太であること

③字間・行間に十分なアキがあること

コストの問題もありますが、これはひるがえって、健眼者のためのミニマムでもあるはずです。

【参考文献】

「弱視者を対象とした『読みやすさ』調査

（『印刷界』一九七三・四「海外出版豆事典」

「視覚障害者の読書環境」（『出版ニュース』

一九七六・九・下 田中章治）

「弱視用拡大図書の現状と展望」（『図書

一九七八・八 拙稿）

【「どらねこ弱視用大活字本既刊近刊一覧」

■文学書シリーズ

1 サン・テグジュペリ「星の王子さま」（岩

波書店）

一、五〇〇円

2 木下順二「夕鶴」（未來社）七九年十二月

刊

3 「ギリシア神話」

選書中

■児童書シリーズ（第1期）

1 神沢利子「くまの子ウーフ」（ポプラ社）

七九年十二月刊

2 ヨゼフ・ラダ「きつねものがたり」（福

音館書店）

一、〇〇〇円

3 宮沢賢治「どんぐりと山ねこ」（筑摩書

房）挿絵―鈴木靖将氏オリジナル

八〇年五月刊

■実用書シリーズ

1 松田道雄「こんなときお母さんはどうし

たらよいか」（喜しの手帖社）

一、〇〇〇円

（高等学校教諭）

『同志社百年史』

——いよいよ出版のはこびに

『同志社百年史』は、一九七七年度から三カ年計画で、六名の編纂企画委員と、三五名の執筆スタッフ（企画委員を含む）によって編纂を進めてきたが、このほど「通史編」（約一七〇〇ページ、二分冊）がほぼ完成した。

内容は、第一部「創業と成育」（明治前半期、第二部「キリスト教教育の受難」（同後半期）、第三部「大学への道」（大正期）、第四部「戦時下の学府」（昭和前半期）、第五部「再生と発展」（同後半期）の五部だてで、各部はそれぞれ一〇章前後から成っている。各章とも、同志社所蔵の記録・資料を重点的に用い、実証的な叙述をもって一貫させたことが大きな特徴のひとつである。

右の「通史編」のほかに、新島襄による開校関係の記録を起点として、現代に至る間の主要な資料を厳選して編纂した「史料編」（約二〇〇〇ページ、二分冊）を刊行する。編纂室では最後の校正にかかっている。

『百年史』に関するお問い合わせ先。同志社社史史料編集所、075-251-3042)